

接触場面における日本語学習者の 合意形成プロセスに関する一考察

一初対面同士の日本語母語話者と学習者の
意見述べの会話の分析を通して一

許 明 子

要 旨

合意形成は円滑なコミュニケーション活動において重要な役割を果たしているが、中上級レベルに達した学習者であってもその重要性を十分に認識していないことがある。そこで本研究では中上級レベル以上の日本語力を有している日本語学習者5名と初対面の日本語母語話者3名が二人ずつペアになって意見交換を行う場面を設定して会話調査を行い、分析した。会話データはビデオカメラで収録し、全ての会話を文字化したテキストデータを用いた。その結果、今回の会話調査に参加した学習者は、会話開始直後のトピックを選択する相談局面において合意形成のプロセスを経ており、その後の談話が順調に展開していることが分かった。また、合意が形成されたことを明示的、非明示的に確認する会話が見られており、それによって双方の意見交換の談話が順調に展開していったことが明らかになった。一方で、日本語学習者の合意形成後の提案の会話において唐突な提案が見られる等、日本語母語話者とは異なる特徴が見られた。

キーワード

合意形成、相談局面、明示的・非明示的、初対面会話、意見述べ

1. はじめに

我々は日常の生活において円滑なコミュニケーション活動を行うために話し手と聞き手の関係性を考慮し、様々なレベルで調整を行っている。あるグループで特定のテーマについてディスカッションを行う場面では参加

者がグループメンバーとして各自の役割を果たすだろうし、初対面の相手と意見交換を行う場面では聞き手との相互行為として談話を展開していかだろう。また、コミュニケーションを行う目的と参加者の属性やコミュニケーション・スタイルによって様々な談話の展開が見られるだろう。本研究ではコミュニケーションに参加するメンバーに注目し、初対面同士の日本語母語話者と日本語学習者がコミュニケーションを行う際に起こりうる問題点について考察する。本研究で初対面同士の接触場面に注目する理由は、かなり高いレベルの日本語能力を有する学習者であっても日本語によるコミュニケーションに自信が持てず困難を感じている学習者が少なくないためである。

本研究では日本の大学で学んでいる初対面同士の日本語母語話者と日本語学習者が意見交換を行う場面において、どのように合意形成を行うかに注目して会話データの分析を行う。意見交換を行う場面に注目しているのは日本の大学で学んでいる外国人留学生は初対面の日本語母語話者と一定のテーマやトピックについて意見交換を行う場面に直面することが多いことから、大学における日本語教育の現場に示唆を与えたいという目的からである。

初対面同士の両者が意見交換を行う場面では、会話開始の段階において合意形成が行われるかどうかとその後の談話展開に影響を及ぼすことが多い。いつ合意がなされたのか分からない、または合意がなされないまま会話が進むことも少なくない。その結果、談話の展開がスムーズに進まなくなり円滑なコミュニケーションが行えなくなることもある。さらには、異文化コミュニケーションの場では相手に誤解を与えたり、摩擦に発展したりする可能性もある。

そこで、本研究では会話の開始部分に注目して、合意形成の有無と過程、合意形成を表明する際の言語表現に焦点を当てて分析を行う。本研究の分析結果を通して日本語学習者のコミュニケーション活動に関する問題点の一部が解明され、日本語教育現場における示唆が得られることが期待される。

2. 調査概要及び先行研究

本研究において分析の対象とする会話データは、初対面同士の日本語母語話者と日本語学習者が日本事情等について日本語で意見交換を行う会話を収録し、文字化を行ったものである。初対面の日本語母語話者との会話において、日本語学習者がどのように自分の意見を表出するのか、相手である日本語母語話者の意見をどのように受け入れるのか、また両者の意見交換を行うためにトピックの選定等について合意形成がなされるのか否かについて分析を行う。

本研究における調査方法は、調査者から日本事情に関する7つのトピックを提示し、その中で意見交換を行うトピックを選択して両者の意見を述べていくように進めた。意見交換を行うトピックの候補を提示する方法は、7つのトピックがリストアップされている一覧表と、トピックが一つずつ細長い紙に書かれているクジのようなものの2種類を用意し、一覧表からトピックを選択するのか、くじ引きでトピックを選択するかの選択方法から両者が話し合って決めるように指示した。つまり、意見交換を行うための会話の冒頭の部分で、両者がトピックの選択方法について合意形成がなされるのか、その場合どのような表現形式で合意形成を行うのかについても考察するためであった。

接触場面の談話分析に関する先行研究の中で、合意形成の過程に注目した研究に大浜（2000）がある。大浜（2000）では、日本人学生20人と外国人留学生20人を対象に、それぞれ2人1組で行った依頼場面のロールプレイの談話を分析した。ロールプレイのテーマは日常的によく経験することでイメージしやすい場面を設定し、「友人に卒業論文のためのアンケート調査に協力してもらうよう依頼し、調査日時と場所を決める」というものであった。大浜の研究ではテーマの導入と表現形式、提案の仕方と談話標識の出現の分析を行っている。

本研究では大浜の分析枠組みの中で「相談局面」と呼んでいる部分に注目する。大浜における「相談局面」とは「アンケート調査への協力が表明された後、実施のための日時場所についての相談が開始するところから合

意を見るまでの相談部分」の合意形成が実際に行われる局面であり、「テーマ導入」「提案」「合意時の表現比較」の3つの部分に分けられている。本研究では、日本事情に関する意見交換を行う会話を分析するが、トピックの選択、つまり「相談局面」と分析枠組みが一致するため、大浜による分析枠組みを取り入れて会話の分析を行う。大浜では、それぞれの局面における日本人学生と留学生の談話展開について分析し、以下のことを明らかにした。

- ① 談話者の役割意識において、日本人が役割分担の意識が高いのに対して留学生は対話者の間に役割の違いがない
- ② 提案の仕方において、日本人は非限定的提案をする傾向があるのに対して留学生は限定的提案をする傾向がある
- ③ 提案に合意する際に、日本人は非明示的な表現をする傾向があるのに対して留学生は明示的な合意表現をする

以上の大浜（2000）の分析を踏まえて会話データの分析を行った。調査概要は以下の通りである。

〈調査概要〉

- 実施時期：2016年2月～6月
- 調査対象：
 - ・ T大学で学んでいる上級レベルの日本語力を有している日本語学習者5名。中国人2名（以下、C1、C2）、韓国人（以下、K）、オランダ人（以下、H）、日系アメリカ人学習者（以下、U）各1名¹
 - ・ 同大学で学んでいる日本語母語話者3名（以下、J1、J2、J3）
- 調査方法：初対面同士のペアで対面式会話。会話は全てビデオで録画し、会話を文字化したテキストデータを用いて分析
- 調査手順：会話開始後お互いが自己紹介し、意見交換を行うトピックを決めて30分程度、自由に意見交換を行う。トピックの選択方法は両者の話し合いで決める。トピックのリストが書かれた一覧

表の中からトピックを選択するか、くじ引きでトピックを決めるかを会話参加者同士の話し合いで決める。トピックの候補は以下の7つである。

- (1) 成人の年齢を下げるべきか否か
- (2) 就学年齢を現在の6歳から下げるべきかどうか
- (3) 消費税率を上げるべきか下げるべきか
- (4) 海外留学を必修科目として指定するべきかどうか
- (5) 人は外見が大事だという意見についてどう思うか
- (6) 美容整形について賛成かどうか
- (7) 韓国の成人男性の兵役義務についてどう思うか

会話参加者は初対面同士であり、学習者同士の会話と日本語母語話者との会話の2種類の会話調査を行った。学習者同士の会話と日本語母語話者との会話に違いが見られる可能性があると考えたためである。

本研究は、日本語母語話者と学習者の間に、相談局面において合意形成がどのように行われていたかについて考察することを目的としているため、主に母語話者と学習者の会話を中心に考察するが、必要に応じて学習者同士の会話の考察を行う。分析の対象となる会話データは、大浜(2000)に倣って「会話開始」から「トピック決定」までの内容を「相談局面」として取り上げ、「テーマ導入」「トピックの選び方の提案」「トピック決定時の合意形成」の3つの局面に分けて、合意形成がどのように表出されていたかについて考察を行った。

3. 分析結果および考察

3. 1 会話開始からトピック決定までの平均時間

今回の調査では日本語母語話者と学習者の接触場面による会話はG1～G4の4ペアで、G5とG6は学習者間の接触場面である。会話データと相談局面の会話時間を表1にまとめた。

表1 会話データと相談局面の時間

グループ	会話参加者	会話時間	相談局面の時間
G1	C1 (中) : J1 (日)	23分42秒	01分11秒
G2	J3 (日) : K (韓)	26分02秒	01分10秒
G3	H (オランダ) : J2 (日)	24分32秒	01分41秒
G4	U (日系アメリカ) : J1 (日)	23分59秒	01分40秒
G5	U (日系アメリカ) : C2 (中)	22分17秒	01分30秒
G6	H (オランダ) : C1 (中)	22分11秒	00分56秒

表1から分かるように会話開始1分前後でトピックの選択方法に関する合意形成の談話に展開しており、今回の調査対象となった会話ペアのいずれもトピックの選択方法について合意を形成するプロセスが明確に表明されていた。全体の会話時間は20分以上であるが、会話開始直後に挨拶や簡単な自己紹介をした後、すぐにトピックの決め方に関する合意を形成する相談局面に展開していた。会話開始から相談局面に展開するまでの平均時間は01分12秒であり、本調査のタスクであるお互いの意見交換の会話が順調に展開していたことが窺える。

前述したように、会話相手と意見交換を行う等の相互行為が必要な会話において会話参加者間の合意形成のプロセスが不明瞭な場合、会話の展開に影響を与えたり、誤解を与えたりすることがある。しかし、今回の会話調査では合意形成のプロセスが明瞭に表れており、会話の展開がスムーズであったことが分かる。今回の会話調査を行ったペアは全て初対面同士の接触場面であるが、会話調査に参加した日本語学習者は高い日本語能力を有しており、高い談話展開能力も併せ持っていたことが要因であったと考えられる。G5、G6のように、初対面同士の学習者間の接触場面でも合意形成のプロセスが表明されることによって、会話は滞りなく展開していったことが明らかになった。

次節では相談局面におけるトピックの選択方法やトピックの決め方に関する会話例の分析を行う。

3. 2 テーマ導入

本節では相談局面のデータ導入の部分を中心に、どのような表現を用いて、誰から誰にテーマを導入したかについて述べる。つまり、本調査におけるテーマ導入は「どのような方法でトピックを選ぶか」について行った会話の部分を目指す。テーマ導入時の表現については大浜（2000）の「伺い表現」と「問いかけ表現」の分類を援用した²。結果は表2のようになる。

表2 テーマ導入の分析結果

グループ	会話参加者	相談局面	方向	表現
G1	C1（中）：J1（日）	J1：「前回どれを話しました？ 1回目の時」	日→外	問いかけ
G2	J3（日）：K（韓）	J3：「どうしましょうね？」	日→外	伺い
G3	H（オランダ）：J2（日）	J2：「なんか、どっちから選びたいですか？」	日→外	問いかけ
G4	U（日系アメリカ）：J1（日）	U：「じゃあ、どうします？」	外→日	伺い
G5	U（日系アメリカ）：C2（中）	C2：「では、これ どっちに？」		問いかけ
G6	H（オランダ）：C1（中）	H：「では、早速、トピックを 見ますか？」		問いかけ

ここでは日本語母語話者が含まれている G1～G4の会話データを中心に見ていく。まず、テーマ導入時の表現から見ると、日本語母語話者から日本語学習者への会話には「問いかけ表現」が2例、「伺い表現」が1例であった。一方、日本語学習者から日本語母語話者への会話は「伺い表現」の1例のみであった。大浜（2000）の分析では、テーマ導入の際に日本人学生の中では「伺い表現」の多用が目立つと述べられているが、本調査の分析結果では日本語母語話者からの「問いかけ表現」の割合が高かった。先行研究とは異なる結果となっているが、本研究で見られた「問いかけ表現」は日本語母語話者から日本語学習者への配慮の一つとして解釈する。既決を前提にした質問の表現形式をとることによって、その質問に対する回答の選択権を日本語学習者に渡す会話を行っており、「問いかけ表現」を用

いることによって日本語学習者に対する配慮を表したものと考えられる。

会話の方向性から見ると、日本語母語話者からの発話が多い。その理由として、日本語母語話者の方から学習者への配慮として、積極的に提案しようという姿勢があったものと考えられる。それは、トピックの選択方法に関する提案の会話において、日本語母語話者は非限定的な提案を行っているのに対して、日本語学習者は限定的な提案のほうが多く見られるという表現形式の違いからも窺える。ここでいう「トピックの選択方法」とは「リストからトピックを選ぶか」「くじを引いてトピックを選ぶか」のどちらを選択する局面である。本研究では「トピックの選び方の提案」を限定的提案と非限定的提案に分けて分析したが、結果は以下の表3と表4の通りである。³

表3 非限定的提案（下線部）

グループ	会話参加者	相談局面	方向
G1	C1 (中) : J1 (日)	J1 : じゃ、どれを話します？ C1 : うん、あ、前回はくじしましたけど J1 : そうですよ、僕もくじして、前回 C1 : うん J1 : うん、だから、 <u>これの、くじの方が楽 だったなあっていう</u> C1 : そうですね J1 : (笑い)	日→外
G2	J3 (日) : K (韓)	J3 : あ、どうしましょう？ K : うんー J3 : その順番に、 <u>まあ1からやるか、どう しようか？それか、なんか話したいこ とありますか？これが面白そうってや つ</u> K : そうですね。 <u>これはどうでしょうか ね？4番目</u>	日→外

表4 限定的提案（下線部）

グループ	会話参加者	相談局面	方向
G1	C1（中）：J1（日）	C1：じゃ、 <u>1</u> から（ <u>笑い</u> ） J1：1から行きますか？ C1：はい。	外→日
G2	J3（日）：K（韓）	J3：えーと、どうしましょうね？ K：じゃ、 <u>くじ</u> で J3：くじでやりますか？せっかくだから。 （笑）	外→日
G3	H（オランダ）：J2（日）	J2：なんか、どっちから選びたいですか？ H： <u>えっじゃこのリストを見よう</u> J2：リストWO見ながらやりますか？	外→日
G4	U（日系アメリカ）：J1（日）	U：えっじゃ、どうします？ J1： <u>く</u> U：くじ J1： <u>僕くじ、くじが</u> U：くじ？くじ J1：はい	日→外

会話の方向性から見ると、限定的提案においては日本語学習者から日本語母語話者への発話が3例あり、日本語母語話者から日本語学習者への1例より多かった。非限定的提案においては、2例とも日本語母語話者から日本語学習者への発話であった。また、表4のG1の会話に見られるように、日本語学習者（C1）が突然限定的な提案をする会話が見られたが、この点では大浜（2000）でも指摘されている外国人学習者の特徴と一致した。

3. 3 トピック決定時の合意形成

本節では合意時の表現を中心に、その表現が明示的か非明示的かについて分析した結果について考察する。合意形成が行われた際の会話と、明示か非明示かをまとめると次の表5のようになる。

表5 合意時の表現

グループ	会話参加者	相談局面	表現形式
G1	C1 (中) : J1 (日)	C1 : じゃ、1 から (笑い) J1 : 1 からいきますか? C1 : はい	非明示
G2	J3 (日) : K (韓)	J3 : くじでやりますか? せっかくだから。 (笑い) K : (笑い) この後何をしたか J3 : じゃ、これにします。 K : (笑い)	非明示
G3	H (オランダ) : J2 (日)	H : これはどうでしょうか? 4 番目。 J2 : 国際交流… H : はい。 J2 : じゃそれにしましょう。 H : はい。	明示
G4	U (日系アメリカ) : J1 (日)	J1 : うんじゃ (くじを選ぶ) 一番下にしよう、ちょっと、これ。 U : えー	非明示

今回の会話調査では日本語母語話者との接触場面の会話において、合意形成がなされた際に、明示的に合意を表明した会話が1例、非明示的に表明した会話が3例であった。明示的な表現形式はG3のJ2による「じゃそれにしましょう」という会話に対して、Hが「はい」と応答している部分である。「じゃ」が合意が形成されたことを表す表現形式として用いられていたことが分かった。大浜(2000:69)によると「じゃ」は日本人学生と外国人留学生の両方の談話において出現頻度が高く、「テーマ導入の問いかけ」「提案」「合意」「先終了句の交換」「別れの挨拶の交換」等にも出現したと述べている。本調査においても、G2とG4の非明示的な合意時の応答として日本語母語話者が「じゃ」「うんじゃ」を用いており、両者の合意が形成されたことを示し、次の談話に展開させていくための表現形式として用いていたことが分かった。

G1、G2、G4の会話の中で■で記した部分は、日本語母語話者が日本語学習者に対して合意が形成されたことを確認するために応答を求めている部分である。G1の会話でJ1が「1から行きますか?」と問いかけたこ

とによって、C1が「はい」と応答し、合意が形成されたことが確認されている。G2の会話においても、J3が「じゃ、これにします」と合意が形成されたことを確認し、Hが笑いで同意を表明している。G4においても同様に、J1がUに対して「うんじゃ」「これ」と倒置表現を用いて合意形成を確認している。

これらの会話から、日本語母語話者は日本語学習者に対して合意形成のプロセスを確認しながら次への会話に展開していることが分かる。それに対して、日本語学習者は「はい」と応答する例もあったが、Hの笑いやUの「えー」のような曖昧に応答しており、場合によっては合意形成がなされたにも関わらず不同意のように受け止められる可能性がある。本研究で取り上げた応答の例は本会話調査のトピックを決める段階の会話だったため、不同意としては解釈されず、誤解にはつながらなかったものの、同意・不同意を明確にしなければならない局面においては誤解を招きかねない応答であると考えられる。

日本語学習者の同意表明の応答について、小松（2015）では韓国語日本語学習者を対象とした会話調査を通して、中級レベルの学習者は「そうですね」という同意を表す相槌が頻繁に用いられていると指摘されている。小松（2015：27）では「そうですね」以外の相槌や相手の言葉の繰り返し等の指導が必要と述べられているが、本研究における会話調査でも合意形成がなされた後の応答については指導が必要であることが明らかになった。合意形成がなされた後の会話が曖昧だったり不同意のような誤解を与えたりする場合、次の会話展開がスムーズに進まないだけでなく、相談局面を蒸し返すような誤解につながる恐れがある。従って、合意を形成するプロセスも重要であるが、合意が形成された際の応答の仕方についても注意が必要であると言える。

4. おわりに

本研究では、日本語学習者の合意形成の有無やプロセスの問題点を明らかにするために、初対面同士の接触場面を設定して会話調査を行い、分析

した。その結果、以下のことが明らかになった。「テーマ導入」については、1) 日本人母語話者からの問いかけは学習者より多かった、2) 日本語学習者に比べて日本人母語話者の会話では「問いかけ表現」が多く、日本語学習者に確認を求めるような配慮がなされていたことが明らかになった。次に、「トピックの選び方の提案」については、「限定的提案」と「非限定的提案」に分けて分析した結果、日本語学習者から日本人母語話者への提案には限定的提案が多く、日本人母語話者から日本語学習者への提案には非限定的提案が多かった。最後に、「トピック決定時の合意形成」では、合意形成を示す言語形式である「じゃ」を用いて合意形成がなされていることを確認していた。

本調査に参加した日本語学習者は非常に高い日本語能力と談話能力を有しており、会話開始後の早い段階でトピックの選択方法等の相談局面で合意形成を行っていた。それによって、テーマ導入や提案等の談話が順調に展開しており、相談局面における合意形成が意見交換の会話を成功させるための重要な役割を果たしたものと考えられる。

一方で、日本語学習者と日本人母語話者の合意形成のプロセスにおいて明示的・非明示的な表現形式に相違点があることや、日本語学習者の会話には合意形成後に唐突な提案がなされる等の特徴が見られた。これらの分析を通して接触場面における意見交換のコミュニケーション活動に注意すべき点等に示唆が得られたと考える。母語場面と接触場面での合意形成の特徴の相違については呉(2016)で指摘されているが、今後は日本語母語話者と学習者のそれぞれの母語場面における合意形成についても調査を行い、分析する必要があると思われる。

異文化を背景とした外国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面同士のコミュニケーションには言語行動のパターンや表現形式の使用面等で様々な違いがあると予想される。その違いについて客観的なデータに基づいた詳細な分析を通して外国人日本語学習者に対する日本語教育や、日本人を対象とする異文化教育の現場に提案していくことが求められる。それは今後の課題としたい。

注

1. 中国人学習者、オランダ人学習者、日系アメリカ人学習者は来日後6か月未満の学習者である。日本語レベルはT大学で実施しているプレースメントテスト(TTBJ)の結果、中上級レベル以上のクラスにプレースされており、日本語による意思疎通には支障を感じない高いレベルの日本語力を有している。
2. 大浜(2000)によると、「伺い表現」とは未決を前提にしたものであり、「問いかけ表現」とは既決を前提にしたものである。
3. 大浜(2000)によると、「限定的提案」とは提案の内容が限定できるものであり、「非限定的提案」とは曖昧でさらなる提案で絞り込む必要があるものである。

参考文献

- 大浜るい子(2000)「日本人学生と外国人留学生における合意形成過程の比較」『広島大学日本語教育学科紀要』10、pp.65-71
- 呉映璇(2016)「接触場面における台湾人と日本人による合意形成談話の特徴」『人間文化創成科学論叢』第19巻、pp.29-36
- 小松奈々(2015)「接触場面の意見交換会話における同意表現—日本語熟達度による比較から」『留学生教育』20、pp.19-28
- 萩原優騎(2018)「現代社会における合意形成の困難」『社会科学ジャーナル』85、pp.23-43

付記

本研究は科学研究費(課題番号:23520610、研究代表者:許明子)の助成を受けて行った研究成果の一部である。また、社会言語学会第44回研究大会(2020年3月実施予定、COVID-19の影響により大会開催は中止)で発表した内容を修正加筆したものである。

